2007 年度 修了

昔話と自己探求
―河合隼雄『昔話と日本人の心』をめぐって―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
赤堀　葉子

自分が納得できるように生きることは容易ではなく、相当に力が要ることである。様々に変化する状況に適応し、時には逆境にも耐え、生き抜いていくためにはどのような心構えが必要であろうか。また、自己の内面から生きる力を引き出すためには、如何に自己を認識し自覚すればよいのか。このような自己探求的な志向が筆者の問題意識としてある。

それは、自己を否定することを含み、差し迫った心境にも苛まれ、苦悩を伴う。「私とは何か」、「人間とは何か」を問うとき、独りで考えるしか方法はないが、その際、古今東西の物語から英知を授かることは可能である。筆者は『昔話と日本人の心』（河合隼雄著）を読み、強く共感し勇気を得た。そこには、弱者が自身の在り方ゆえの知性（意識）を隈なく発揮して生き抜く姿が、巧みに描かれていたからである。

河合は、昔話に登場する主人公（特に女性）に心理学的な特性を当てはめながら、日本人の意識の在り方を論じている。自己の本性を見られて去っていく「あわれ」な姿から、耐える生き方を経験して、その後反転し極めて積極的に生きる姿まで、日本人が持っている様々な意識を分析している。その頂点に立つのは従順で忍耐強く、無意識界と深く繋がり、直感に優れ、潜在する能力を引き出す存在としての意識の在り方である。無論、河合は西洋との比較を怠ることなく、グリム昔話やギリシャ神話などから類話を引き合いに出したり、人間の普遍的な心理について解釈したりしている。さらに、意識の多層性や自我意識発達過程の理論など、西洋の学問である深層心理学の手法を縦横無尽に駆使して、日本の昔話を分析している。思うに、欧米人の近代的自我という強烈なインパクトを受けて、必然的に日本人である我が身を振り返り、この著書において日本的特性を検証したものと推察する。結論において、「日本人の意識は何ものをも受け容れ、全体性を重んじる」と述べ、悪をも許容して人間存在の全体性を受け容れる日本的特性を、河合は評価している。

筆者にとって昔話を読む醍醐味は、そこに突然訪れる決定的瞬間の有様を想像し、荒唐無稽の表現の意味を探り、登場人物の役どころを実社会に投影する面白さである。時には、思いがけず自己の深層に触れ、宗教的開示までも示唆される場面に遭遇するチャンスがやってくる。昔話は手近なものであるが、その奥は深い。

実生活において与えられる運命は避けがたく、人間の存在をコントロールすることは至難である。悠久の歴史を振り返れば、人間は当為を生きる存在であると言える。昔話の世界がもたらす象徴は、案外人間社会にも通じる。今後も、物語（昔話を含む）を通して、人間の経験が持っている多義性・多様性と多大な価値を見直し、そこから根源的な生命エネルギーを感得したいと思う。それは、自己を探求し、自己を育てることに繋がる。